

2021年度教育研究活動報告用紙(様式9)

氏名	吉原 悦子	職名	講師	学位	修士(看護学) 大分大学 2007年
----	-------	----	----	----	--------------------

研究分野	研究内容のキーワード
老年看護学 地域包括ケア	認知症高齢者のケア 地域貢献活動 実習における学生の学び

研究課題
<ul style="list-style-type: none"> ・認知症高齢者のケア ・地域活動に参加した学生の学び ・実習における学生の学び(高齢者理解について)

担当授業科目
(前期) <ul style="list-style-type: none"> ・地域連携協働支援論 ・地域生活支援論 ・老年看護学演習 ・在宅看護学 ・在宅看護学演習 ・看護研究 ・高齢者支援学Ⅰ ・高齢者支援学Ⅱ(開講なし) (後期) <ul style="list-style-type: none"> ・老年看護方法論 ・看護学(栄養学科)(開講なし) (通年) <ul style="list-style-type: none"> ・老年看護学実習Ⅱ ・看護総合演習 ・看護総合実習

授業を行う上で工夫した事項(※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
<p>授業科目名【地域連携協働支援論】</p> <p>昨年と同様、自分自身のことと捉えられるように日常生活をイメージするような課題を提供した。毎回の講義での学びや質問を記載してもらい、次の時間に解説を行い、学生の気づきや疑問を表出しやすいようにした。学生の自由な発想を妨げないように、学生が提出した課題について発表を行い、共有した。講義の中で地域・看護・認知症・高齢者・障害者などのキーワードを柱とし、トピックスなどを交えて提供し、地域で生活する人々への幅広い視点を持てるようにした。途中、小テストを行い、学習状況の確認を行った。</p> <p>講義開始時にシラバスを用い、評価基準や講義で課される課題について説明を行ってきたが、授業評価でシラバスを確認した学生の割合が少なかったため、複数回、丁寧に説明をする必要があると考える。今年度は、対面と遠隔併用での講義であったが、講義資料は余裕をもって事前にクラスルームに提示し、予習や印刷に時間がとれるようにした。講義の中ではできるだけ集中して取り組めるように、具体例をあげ、学生がイメージしやすいように話をし、興味や関心を持ってもらう工夫を行った。</p>

授業科目名【地域生活支援論】

本科目は、必修科目である。2年次に学ぶ「地域連携協働支援論」に次ぐ科目であり、地域で生活するあらゆるライフステージにある人々の健康を支えるための知識・ケアを学ぶ科目である。そのため、これまでに学んだ各領域の概論や方法論をベースにし、保健・医療・福祉・教育などの領域の専門職との協働連携や包括的にケアする方法、その中で看護師の役割などを講義した。講義内容は様々な領域にわたるため、身近な具体例を用いながら関心を持ってもらうようにした。昨年と同じく、講義終了後には出席カードにより、学びや質問を確認し、次の講義の際に説明を行った。4コマ目には確認テストを行い、学習状況の確認を行った。今年度は対面と遠隔での併用の講義であったため講義資料を余裕をもって提示し、予習や印刷が可能となるようにした。また、配布資料については、学生の意見を取り入れ、余白の量について検討した。課題以外の学習はほとんどの学生が行っていないが、毎回の課題をきちんと提出しており、課題によって復習や調べることもつながっていた。講義後半については、対面講義であり、課題について学生同士で検討を行うことができるようにしていった。

授業科目名【老年看護学演習】

老年看護学概論・老年看護学方法論をもとに演習を行った。前半、看護技術、後半は事例患者を用いて看護過程を行う際に、具体的な視点を学生に伝えていった。看護過程では、教員の模範解答ではなく、学生自身が記載したものを元に解説を行った。事例については2年時の方法論でも触れており、老年特有の疾患で、対象理解を進めていった。事例患者をイメージしながら看護実践が行えるように関連性を持たせ、技術演習を行っていた。遠隔講義であったため、パソコンやタブレットなど複数の機器を使い、教員がリアルに看護実践を行う様子を映像として映し、伝えていった。特に安全面やプライバシーの配慮、十分に気を付けることが望ましい場面については、繰り返し伝えていった。さらに、ユニ・チャームの出張講義を活用し、おむつの開発側からの講義を行ってもらい、学生の視野を広げていった。

授業科目名【在宅看護学】

継続看護、地域包括ケアの部分を担当した。なぜ地域包括ケアが必要になったのかについて、社会的背景、制度を含めて解説した。学生は、昨年も臨地実習に行けておらず、疾患や後遺症などのイメージがつきにくく、これまで、各領域の概論や方法論で学んできたことを繰り返し、想起しながら、講義を行った。また、病院、在宅など切れ目のない看護を提供することをイメージ付けるためにも具体例を挙げながら、病院から在宅、在宅から病院での継続の方法や関連職種などを含めた連携を具体的に実際のやり取りや身近な話題を組み込みながら伝えた。

授業科目名【在宅看護学演習】

在宅看護学を踏まえながら、演習を行っていった。特に看護過程では在宅の特有の視点と特徴を踏まえることができるように指導を行った。今年度は、家庭訪問の場面や実際のケア場面をロールプレイし、実習と関連付けておこなった。自己課題が進まない学生については、担当教員で個別に指導を行った。在宅看護では、いろんな世代を対象とするため、演習内容も幅広いことや看護師だけでなく、多職種と連携する必要や家族への視点も重要であり、特に意識して伝えた。疾患を治療することだけでなく患者さん本人と家族の可能な限り望ましい生活に近づけるための援助を伝えていった。

授業科目名【看護研究】

本講義は5名の教員で担当した。研究の基本となる講義とグループワークで構成している。研究計画書の作成から簡易的な調査を実施し、抄録を作成し、発表する一連の流れを行っている。初めて行う作業であり、学生はイメージがつかないまま、グループワークを行っていることも多く、具体的にどう進めていくのか考え方を説明した。特にオンラインでのグループワークを行ったため、学生間の困りごとにも耳を傾け、修正を行った。

授業科目名【看護総合演習・実習】

今年度は6人の学生を担当した。看護総合演習・実習については、関心のある分野の論文を読み、ゼミのメンバーと意見交換を行った。しかし、今年度も臨地の実習は難しく、実践はできなかった。しかし、今年度より、新規の実習場を開拓し、地域での困りごとや地域支援の視点での実習を行うことができた。また、実習先の職員へのインタビューなどを行い、高齢者支援の理解を深めることができた。

授業科目名【老年看護学方法論】

高齢者のリハビリテーション、認知症、高齢者に起こりやすい症状とケアについて担当した。基本的な疾患や症状はすでに学んでいるため、高齢者では特に気を付けるべきことについて具体的な実習場面を盛り込

み、講義を行った。しかし、昨年は遠隔での講義であったため、1年生での復習の部分も取り入れ、形態機能学や概論などとの関連科目とのつながりを行いながら講義を行った。特に認知力の低下した高齢者については一般的なかかわりの原則は理解しているが、実習中のエピソードなどを取り入れることで、具体的な場面をイメージしながら講義を聞くことができた。また、講義ごとに質問や学びの意見を収集し、次の講義で解決し、さらに追加の解説を行っていった。

授業科目名【老年看護学実習Ⅱ】

3年生後期から4年生前期にかけての実習である。この実習では、高齢者施設での実習であり、コロナ感染対策のため、学生の施設への立ち入りはできなかった。しかし、教員の施設への立ち入りを許可していただき、オンラインで療養者と学生をつなぎ実習を行った。しかし、画面上では、療養者の全体像が見えにくい実習であるため、学生の考えや捉え方を十分に確認することや職員へのインタビューを行いながら療養者の生活の全体が把握できるように行った。また、訪室する時間帯を変えて食事の様子や他の入居者とのかかわり、歩行状態や施設の設備などをオンラインでつなぎ、学生が施設に入所する高齢者の生活を環境も含め把握できるように工夫した。高齢者は難聴や認知力の低下がありオンラインでのコミュニケーションは難渋したが、パソコンやスピーカーなどを使用し、出来るだけ直接やり取りができるようにかかわった。認知力が低下している高齢者とのかかわりになるため、言語だけを聞くのではなく、その人の持つ背景を鑑み、受け持ち療養者さんのメッセージをくみ取るように指導した。オンラインの中でも一緒に歌を歌ったり、折り紙を折るなどの気分転換活動へのケアも提供できた。また、学生の主体性や積極性を育むためにも学生自身の1日の組み立てに沿って、実習を展開するように行い、学生の学びにつながったと考える。

コロナ禍における実習のため、教員は、毎回の実習開始前にはPCR検査にて陰性を確認した後、実習施設への入館を行った。

授業科目名【高齢者支援学Ⅰ】

本科目は、保健福祉学部3学科合同の科目であり、アクティブ高齢者への支援について、講義とPBL(事例検討)を通して検討した。本年度は遠隔授業で実施したため、例年以上に、学生の内容理解を助けられるよう、説明方法や提示資料を工夫した。特に看護学科以外の学生の理解が進み、その後のPBLにおいても、ディスカッションがスムーズに進むように働きかけた。

学 会 に お け る 活 動

所属学会等の名称	役職名等(任期)	加入時期
日本看護学教育学会		2001.4～現在に至る
日本老年看護学会		2003.4～現在に至る
日本老年社会科学会		2003.4～現在に至る
日本認知症ケア学会		2006.4～現在に至る
日本看護科学学会		2008.6～現在に至る
公益社団法人「認知症の人と家族の会」		2016.5～現在に至る
血管看護研究会		2021.11～現在に至る

2021年度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
(翻訳)				

2021年度 研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学会発表) 施設入所高齢者がライフストーリーを語る意義について学生が捉えた施設別の特徴—実習レポートの分析から—	共	2021年11月	第52回日本看護学会学術集会	①高齢者施設実習において学生が入居高齢者のライフストーリーを聞き取り、高齢者が語る意義について書かれたレポートを分析し、施設別の特徴を明らかにした。頻出語についてそれぞれの施設で特徴があった。 ②吉原悦子、金子由里、溝部昌子、丸山泰子 ③第52回日本看護学会講演集(P230)
(その他) グラフィックレコーディングの活用による学修効果への影響の検討	共	2022年3月	2021年度保健福祉学研究所研究報告会	溝部昌子、吉原悦子、金子由里、野地有子

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(1) 共同研究

研究題目	交付団体	研究者 ○代表者（）内は学外者	交付決定額 (単位：円)
看護師による POCUS 活用に関する研究—DVT 予防対策と安全なケアへの効果—	文部科学省科学研究費補助金 基盤 (B)	○溝部昌子、 <u>吉原悦子</u> 、金子由里	910,000円 (R3)
グラフィックレコーディングの活用による学修効果への影響の検討	西南女学院大学保健福祉学部附属研究所	○溝部昌子、 <u>吉原悦子</u> 、金子由里	141,000円

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）

(2) 個人研究

研究題目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備考

社 会 に お け る 活 動 等		
団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 間 等
北九州市障害支援区分認定審査会 第7回血管看護研究会	委員 実行委員	2021年4月～現在まで 2022年5月

学 内 に お け る 活 動 等 (役職、委員、学生支援など)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報システム管理運用委員 2020.4～2022.3 ・ 地域連携室員 2020.4～2022.3 ・ 看護学科3年生アドバイザー 2021.4～2022.3 ・ 看護学科物品係 2021.4～2022.3 ・ 模擬講義 (高稜高校) 2021.10.19 ・ 認知症サポーター養成講座 (看護学科、福祉学科合同) 2021.1.14